

令和 2 年 4 月 21 日現在

機関番号：32682

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2019

課題番号：18K12413

研究課題名（和文）抜き出しの可能性に基づく名詞句省略と項省略に関する比較統語論研究

研究課題名（英文）A Comparative Syntactic Study of NP-ellipsis and Argument Ellipsis: A View from Extraction Possibilities

研究代表者

坂本 祐太（Sakamoto, Yuta）

明治大学・情報コミュニケーション学部・専任講師

研究者番号：40802872

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：2年の助成機関を通して、名詞句省略及び項省略と呼ばれる言語現象の記述的及び理論的研究を推進した。記述的研究に関しては、米国コネチカット大学への滞在を通して、ドイツ語・ブラジルポルトガル語・イタリア語などの調査を行い、言語資料の拡充を行った。また理論的研究に関しては、主に国際学会での発表などを通し、LFコピーと呼ばれる操作に対し記述的観点からサポートを行い、その理論的な帰結を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、「なぜ照応現象（特に省略現象）は音声的に不完全にも関わらず、母語話者は一様の解釈可能性及び統語（文法）的特性を示すのか」という問題に取り組んだものである。本研究で行われた言語横断的な調査及び理論的研究の推進により、一見全く違うと考えられている言語（例えばドイツ語とイタリア語）に見られる新たな共通点が明らかになり、「ヒトはなぜ母語を獲得できるのか」という問いに対し「ヒトには遺伝的に母語を獲得する共通能力が備わっている」とする生成文法理論の考え方が支持された。従って、ヒトの言語獲得過程の解明及び言語現象の記述という二点に関して本研究は貢献できたと考えられる。

研究成果の概要（英文）：For the two-year grant period, I worked on linguistic phenomena called NP-ellipsis and argument ellipsis. Descriptively, having stayed at the University of Connecticut, I worked with native speakers of e.g. German, Brazilian Portuguese, and Italian and found out novel data on the phenomena in question. Theoretically, I made several descriptive arguments for the availability of a linguistic operation called LF-copying, demonstrating its theoretical consequences.

研究分野：言語学 英語学

キーワード：照応現象 移動 生成文法 統語論

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景には、照応という現象を通してヒトの言語知識およびその基盤となる普遍文法の仕組みの解明に貢献するという意識があった。研究開始前まで、私は英語を中心とした印欧諸語における照応現象に関する研究成果を、それらの言語とは類型論的に異なる諸特徴を有する日本語などの言語に応用することで、新たな知見を多く得てきた。しかし、研究を進める中で「なぜ自然言語における照応現象の中で抜き出しのパターンが一様ではなく、言語間及び言語内で多種多様な差異があるのか」という問いが生じ、より詳細な記述研究と理論的説明の必要性を感じた。当時、私の知る限り、顕在的抜き出しと非顕在的抜き出しに関して対比を示す、本研究が焦点を当てる名詞句省略と項省略からの抜き出しのパターンは申請者の研究以外では指摘されていないなかった。そこで、名詞句省略と項省略に関する詳細な理論的研究および記述的研究を行い、その本質を明らかにすることが理論言語学の更なる発展にとって重要であるという着想に至った。

2. 研究の目的

本研究は、先行研究において中心的に研究されてきた照応現象において、顕在的抜き出しと非顕在的抜き出しの対比という新たな観点から、「なぜ照応現象は音声的に不完全であるにも関わらず、母語話者は一様の解釈可能性及び統語的特性を示すのか」という問題に取り組むものであった。この点で、本研究は従来の省略現象研究にはない研究成果が挙げられると考えた。例えば、Hankamer & Sag (1976)の研究による伝統的な表層照応の本質を捉える上で、顕在的抜き出しと非顕在的抜き出しの違いを考慮することの重要性が明らかにすることを大きな目的とした。先行研究では、顕在的抜き出しに関して受動態移動のような A 移動と wh 移動のような \bar{A} 移動の区別を考慮することは一般的になりつつあるが、顕在的移動と非顕在的移動の区別を考慮する重要性は私の知る限りあまり議論されていなかった。従って、本研究が完成することにより得られる結果が、今後の照応現象の研究の際に参照または取り入れられると考えた。

3. 研究の方法

本研究では、【1】抜き出しに関して顕在的移動と非顕在的移動の対比を示す照応形の記述を行うために、英語及び英語以外の名詞句省略と、私がこれまでに考察した言語の項省略及びそれ以外の言語の項省略に関してデータ収集が必要であった。各言語のデータ収集に関しては、生成文法の枠組みで伝統的に用いられてきた母語話者の内省判断に基づく容認判断、及び文献調査の手法をとった。英語は、私の博士論文審査委員であった Jonathan David Bobaljik 氏と Ian Roberts 氏をはじめ、アメリカでの大学院生活で交流のあった文法性判断の訓練を十分に受けた大学院生に協力を依頼した。日本語に関しては、中京大学及び明治大学の言語学研究者及び東海圏・関東圏で交流のある言語学者に協力を依頼した。また、その他の言語データ収集に関しても協力を依頼できる研究者あるいは大学院生がおり、言語収集に関して研究をスムーズに進めることができる環境が整っていた。また、【2】抜き出しに関して顕在的移動と非顕在的移動の対比を示す照応形に対する理論構築に関しては、Željko Bošković 氏(コネチカット大学大学院言語学科教授)、高橋大厚氏(東北大学大学院国際文化研究科教授)、斎藤衛氏(南山大学国際教養学部教授)、Kyle Johnson 氏(マサチューセッツ大学アマースト校大学院言語学科教授)との、意見交換・共同研究を継続した。また、国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語から生成文法理論へ—統語理論と言語獲得」(代表: 南山大学外国語学部村杉恵子教授)、「生成文法研究会」(代表: 慶應義塾大学言語文化研究所北原久嗣教授)、「Ling Supper」(代表: 三重大学人文学部菅原彩加講師)における研究発表を通して、本研究の評価体制も整っていた。

4. 研究成果

2018年度は研究実施計画の【2】「抜き出しに関して顕在的移動と非顕在的移動の対比を示す照応形に対する理論構築」に重点を置いて研究を行った。まず、5月に米国コネチカット大学に滞在し、Zeljko Boskovic 教授と当該の照応現象及び理論構築に関して意見交換を行った。2017年度の博士論文では Overt Syntax と Covert Syntax を区別する Y モデルを採用し、当該の照応現象に LF コピー分析を用いて理論的説明を与えたが、現行のミニマリスト・プログラムでは Overt Syntax と Covert Syntax の区別は仮定されておらず、LF コピー分析は理論的問題に直面していた。また、空演算子移動のような従来 Overt Syntax での移動と考えられていた非顕在的移動を LF での操作と考える必要性もあった。しかし、意見交換及びその後の研究を通して Nissenbaum (2000)の「Spell-out は統語的対象物の音韻素性を剥離するものである」という仮定と Chung, Ladusaw, and McCloskey (2006, 2011)の「LF コピーは既に Spell-out を受けた要素をリサイクルする操作である」という仮定を組み合わせることにより、抜き出しに関する顕在的移動と非顕在的移動の対比を捉えるのと同時に、ミニマリスト・プログラムに適合する形で

LF コピー分析を理論的に採用できる方向性が明らかになり、空演算子移動に関しても理論的に特別な仮定をすることなく扱うことができるようになった。2018 年度の研究により、ミニマリ
スト・プログラムの下での LF コピー分析の新たな理論的展開がなされ、照応現象研究に一石を
投じることができたと考えている。

2019 年度は【1】「抜き出しの可能性に関する名詞句省略と項省略の通言語的な記述」を中心
に研究を進めた。メールを介した言語資料収集に加えて、9 月に米国コネティカット大学に滞
在し、Zeljko Boskovic 氏の協力を仰ぎながら言語学科の大学院生に依頼をして言語資料の収集
を行った。名詞句省略に関しては、英語の名詞句省略が示す特異な抜き出しのパターン(wh 移
動による抜き出しは許されないが、量化詞繰り上げによる抜き出しは許される)は、他の言語(ド
イツ語・イタリア語・ブラジルポルトガル語など)の名詞句省略では観察されないことが明らか
になった。具体的には、調査を行った言語の名詞句省略に関しては、当該の省略位置から wh 移
動による抜き出しが可能であり、通言語的に英語の名詞句省略が示す抜き出しのパターンは非
常に稀有なものであることが明らかになった。従って、最終年度の研究により、「なぜ英語の名
詞句省略のみが特異な抜き出しのパターンを示すのか」という新たな研究テーマを見出すこと
ができた。項省略に関しては、シンガポール英語を中心に新たな記述を進めた。調査の結果、2017
年度の博士論文で記述研究を行った日本語・韓国語・中国語・トルコ語・モンゴル語の項省略
位置からの抜き出しのパターンとは異なり、シンガポール英語の項省略位置からは顕在的な抜
き出し(wh 移動)も非顕在的な抜き出し(関係節における空演算子移動)も一様に許されない可
能性が高いことが明らかになった。まだ他の種類の移動も検討する必要があるが、もし上記の可
能性が事実だとすると、シンガポール英語でこれまで項省略と呼ばれている現象は、理論的には
空の代用形(pro)である可能性が高く、通言語的に項省略現象を検討する重要性が再度浮き彫
りとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Sakamoto Yuta	4. 巻 50
2. 論文標題 Overtly Empty but Covertly Complex	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Linguistic Inquiry	6. 最初と最後の頁 105 ~ 136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1162/ling_a_00302	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sakamoto Yuta	4. 巻 未定
2. 論文標題 Recycling Arguments in Radical Pro-drop Languages	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Proceedings of the 14th Workshop on Altaic Formal Linguistics	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sakamoto Yuta	4. 巻 15
2. 論文標題 Verb-echo Answers in Mongolian	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Nanzan Linguistics	6. 最初と最後の頁 45, 63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 坂本祐太
2. 発表標題 英語の名詞句削除と抽出について
3. 学会等名 日本英文学会第91回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Sakamoto Yuta
2. 発表標題 Recycling Arguments in Radical Pro-drop Languages
3. 学会等名 The 14th Workshop on Altaic Formal Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Sakamoto Yuta	4. 発行年 2020年
2. 出版社 John Benjamins	5. 総ページ数 266
3. 書名 Silently Structured Silent Argument	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	B a o L i n a (Bao Lina)		
研究協力者	P a r k M y u n g - K w a n (Park Myung-Kwan)		
研究協力者	Y o o Y o n g S u k (Yoo YongSuk)		